

ベネッセコーポレーション「現代人の語彙に関する調査」結果分析

# 高校生の「探究的な学習活動」への取り組みは「語彙力」の高さに影響

ベネッセコーポレーションでは、全国の高中生から社会人までを対象に「現代人の語彙に関する調査」を、2016年から実施している。その結果から、「学校で自分で課題を立てて情報を集めて整理して、調べたことを発表する」といった、「探究的な学習活動」に取り組んでいる高校生は、取り組んでいない高校生よりも「語彙力」が高い傾向が見られた。

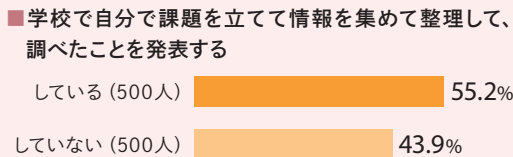
※本調査では、対象の言葉のうち回答者が「知っている」と答えた割合をその人の「語彙力」としている。

高校の新学習指導要領は、2022

年度から年次進行で実施される予定だが、現行の「総合的な学習の時間」から改まる「総合的な探究の時間」については、19年度以降の入学生（現高校1年生）から適用される移行措置が採られている。そうした背景もあり、生徒が自ら課題を設定する「探究的な学習活動」に取り組む高校が増えている。

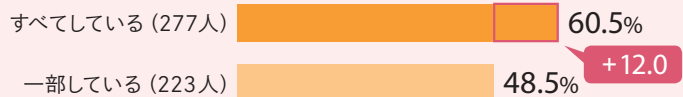
今回ベネッセコーポレーションが行った「現代人の語彙に関する調査」（以下、本調査）の結果を、高校生の「探究的な学習活動」への取り組み状況と「語彙力」との間に、どの

図1 「探究的な学習活動」の取り組み状況による「語彙力」の違い



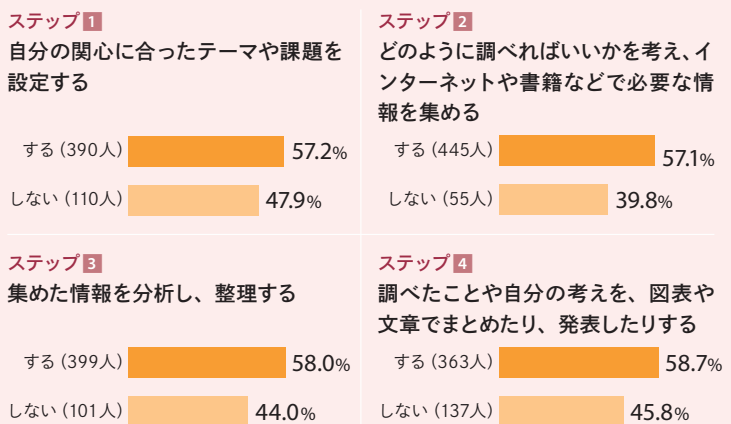
注1) 「している」は当該設問に「よくしている」「ときどきしている」と答えた人の語彙力。「していない」は当該設問に「あまりしていない」「まったくしていない」と答えた人の語彙力。  
注2) 数値は、小数点以下2桁目を四捨五入して計算。  
注3) 上図では、高校生の語彙力を掲載。

図2 「探究的な学習活動の具体的なステップ」の取り組み状況による「語彙力」の違い



※「すべてしている」は、1～4のステップ全部に取り組んでいる対象。

■それぞれのステップごとの取り組み状況



注1) ステップ1～4の図は、「探究的な学習活動の具体的なステップ」についての数値。「する」は当該設問に「よくする」「ときどきする」と答えた人の語彙力。「しない」は当該設問に「あまりしない」「ほとんどしない」と答えた人の語彙力。  
注2) 数値は、小数点以下2桁目を四捨五入して計算。  
注3) 上図では、高校生の語彙力を掲載。

ような関係があるのかに着目して、紹介する。

## 「探究的な学習活動」に取り組む高校生の「語彙力」

「探究的な学習活動」に取り組んでいる高校生は、調査対象の半数であった。そのような学習活動に取り組んでいる高校生は、取り組んでいない高校生よりも、「語彙力」が高かった(図1)。

さらに、「探究的な学習活動」を4つのステップに分けて「語彙力」を見たところ、「すべてしている」高校生の「語彙力」は、「一部している」高校生の「語彙力」よりも12・0ポイント高かった(図2)。このことから、4つのステップすべてに取り組むことが、高校生の「語彙力」をより高めることにつながる可能性があると考えられるのではないだろうか。

「社会の変化」や「新しいこと」への前向きな意識と「語彙力」

「総合的な探究の時間」では、新時代を生きる生徒に求められる問題解決能力と主体的な学びの姿勢を身につけさせることを目標としている。生徒が社会の変化に向き合おうとしている意識と「語彙力」には、どのような関係があるのか(図3)。「社会で必要とされるスキルや能力は時代と共に変わっていくと思う」と考えている高校生は、そう考えていない高校生よりも、「語彙力」が13・9ポイント高い結果となった。また、「生涯にわたり新しいことを学び続けたい」と考えている高校生は、そう考えていない高校生よりも「語彙力」が12・3ポイント高かった。その傾向は、高校生だけではなく、20・30代の社会人、40～60代の社会人でも同様で、「社会の変化に対応していこう」といった意欲や、「継続的に学び続けたい」といった意識を持つことが、視野を広げ、主体的に自分の将来を築いていく姿勢につながり、語彙力を高めることに結びついていると言えそうだ。

図3 「社会の変化」や「新しいこと」への意識の差による「語彙力」の違い

項目	回答	高校生			大学生			社会人(20・30代)			社会人(40～60代)		
		回答者数	平均語彙力	差	回答者数	平均語彙力	差	回答者数	平均語彙力	差	回答者数	平均語彙力	差
社会で必要とされるスキルや能力は時代と共に変わっていくと思う。	あてはまる	857	51.5	13.9	849	62.4	8.4	402	57.9	14.5	433	69.8	13.4
	あてはまらない	143	37.6		151	54.0		98	43.4		67	56.4	
社会で必要とされるスキルや能力が変わった時には自分で努力して身につけたいと思う。	あてはまる	818	51.6	11.3	828	62.2	6.2	358	58.7	12.8	339	70.8	8.7
	あてはまらない	182	40.3		172	56.0		142	45.9		161	62.1	
生涯にわたり新しいことを学び続けたい。	あてはまる	539	55.2	12.3	728	63.7	9.5	307	61.1	15.6	304	70.8	7.1
	あてはまらない	461	42.9		272	54.2		193	45.5		196	63.7	

注1) 上記の図は「社会の変化」や「新しいこと」についての設問に対する数値。「あてはまる」は当該設問に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と答えた人の回答者数と語彙力。「あてはまらない」は当該設問に「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えた人の回答者数と語彙力。  
注2) 数値は、小数点以下2桁目を四捨五入して計算。

「現代人の語彙に関する調査」概要

- ◎ 「Literas 論理言語力検定(\*1)」を主催するベネッセコーポレーションが、全国の高校生から社会人までを対象に実施。
- ◎ 第4回は2019年7月に実施し、回答者数は3,000人。
- ◎ 語の難易度・分野・バランスを考慮して、「辞書語彙(\*2)」「230語」「新聞語彙(\*3)」「220語」を選定。これらの「熟知度(\*4)」を調べ、現代を生きる人々の言語活動の実態、及び年代、生活、行動などによる「語彙力(\*5)」の違いを明らかにすることで、現代人に必要な言葉の力を高めるにはどうしたらよいかを検討することを目的とする。
- ◎ 詳しい調査結果は下記をご覧ください。  
<https://literas.benesse.ne.jp/>
- \*1 「Literas 論理言語力検定」はベネッセコーポレーションの主催で、2019年11月より実施している検定です。学校単位でのお申し込みとなります。
- \*2 主に国語辞典に掲載されている、文章や会話を理解し、的確に表現するために必要な語彙。
- \*3 新聞に掲載されることの多い、社会生活に必要な基礎知識や時事知識に関する語彙。
- \*4 調査対象の各語について、「知っている」と回答した回答者の割合。
- \*5 各回答者が、自身が回答した調査対象語のうち、「知っている」と答えた語の割合(各回答者が「知っている」と答えた語の数/回答した語の数×100(%))。

高校生と親世代の語彙の世代間ギャップ

高校生が親世代より知っている語彙の多くは、SNSなどでよく使われるひらがなやカタカナの短い言葉に集中しているが、記述式試験や、推薦入試で課される小論文・面接では、そうした言葉は通用しない。2018年のOECD「生徒の学習到達度調査(PISA)」で、日本の「読解力」の平均得点が落ち、順位も前回の8位から15位に下がったことから、「読解力」を支える「語彙力」の低下が危惧されている。

順位	語彙	高校生が親世代よりも「知っている」割合が高い語			親世代が高校生よりも「知っている」割合が高い語			
		高校生	親世代	差	高校生	親世代	差	
1位	いつメン(いつものメンバー)	63.5	9.0	54.5	胸算用	20.5	76.0	55.5
2位	とりま(とりあえず、まあ)	75.0	22.0	53.0	こきおろす	30.0	83.0	53.0
3位	りょ(了解)	73.5	24.0	49.5	骨子	20.0	67.0	47.0
4位	ツイキャス(ライブ配信サービス)	61.0	17.0	44.0	左団扇(ひだりうちわ)	40.0	86.0	46.0
5位	タピる(タピオカ入りドリンクを飲む)	56.5	15.0	41.5	未曾有(みぞう)	47.5	93.0	45.5
6位	パリピ(partly peopleの略語)	81.5	42.0	39.5	忌憚(きたん)	16.0	61.0	45.0
7位	あり寄りのあり(断定を避けた「あり」の表現)	52.5	15.0	37.5	勘案	22.0	66.0	44.0
8位	わず(過去のできごと・was)	44.0	9.0	35.0	気炎を上げる	13.0	57.0	44.0

注1) 差が大きい順に8語ずつ掲載。注2) 親世代=社会人40～60代。  
注3) 数値は語の熟知度(%)。小数点以下2桁目を四捨五入して計算。